

Working

Eating

Playing

Sleeping

Staying

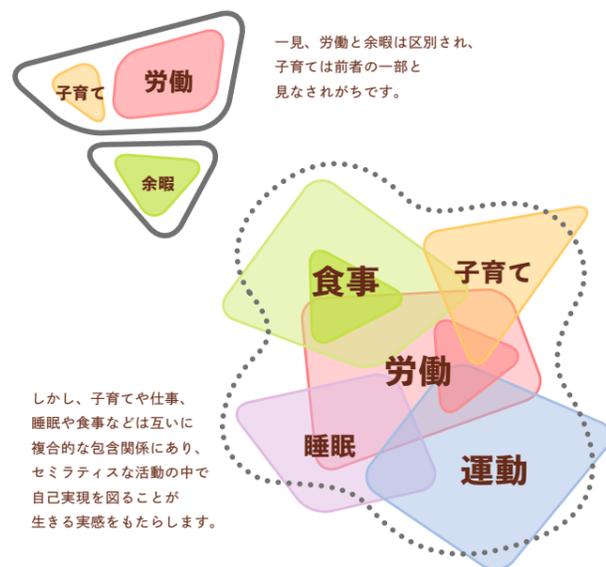
KENCHO AMAZING PARK

Future
Vision

WELL-BEING = よく生きること

近年、若者の労働観について「タイムパフォーマンス」という言葉をよく耳にします。これは、労働と余暇を分離して考え、勤務時間はただ効率的に業務をこなし、余暇にできるだけ時間を割こうという考え方です。

しかし、人間が「生きる」というのは、そんなに単純なものでしょうか。働くこと、食べること、寝ること、子を育てること、旅をすること、買い物をする、**全てがひとつながりの生活の中で、コミュニティを形成し、自己実現を図ること、それが新しいウェルビーイングの形です。**



モビリティの活用とお団子型の回遊性

県庁周辺エリアには、路面電車の他、シェアサイクルのネットワークや、ノルディックウォーキングポールのレンタルスポットなども充実しています。こうしたモビリティを最大限に活かし、ウォークアブルなまちとして地域全体の回遊性を高めるためには、小さな目的地が連続してあることが肝要です。ちょうど富山市がお団子と串の都市構造によってコンパクトなまちづくりを目指しているのと同じように、スムーズに移動できる経路と、その途中途中で休憩したり、食事をしたり、写真を撮ったり、人と話したりするための場が両方あってはじめて賑わいがまち全体に連続します。本計画では、県庁舎を南北に貫く**パブリックな動線(串)**と、**多様なアクティビティを受け止める公園(団子)**を計画します。

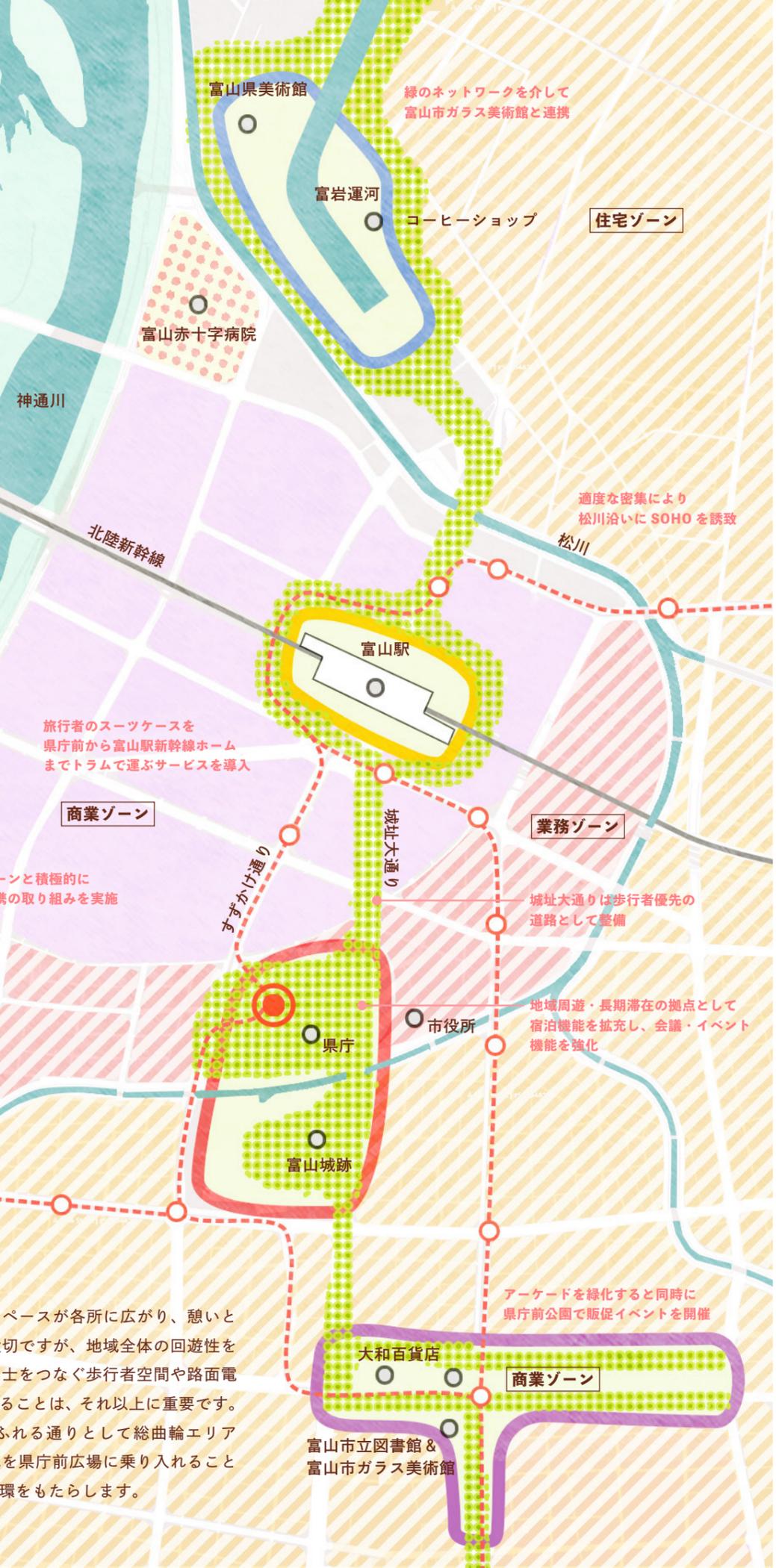
都市のスポンジ化と豊かさをつくる余白としての公園

県庁エリア周辺を俯瞰して見てみると、周囲に比べて街区割が大きく、学校や駅、美術館、ホテルなど、大きな建物が建ち並んでいることが分かります。これは、かつて東側に大きく蛇行していた神通川を埋め立て、公共性の高い土地利用を進めたことによるものです。

しかし昨今、大規模な建築物は老朽化に伴って、維持管理のためのコストや消費エネルギーの問題が顕在化し、**徐々に大規模な街区はその用途を見出せず、スポンジ化していくことが予想されます。**

都市にできた空隙を建築で無理やり埋め尽くすのではなく、**周辺のアクティビティを受け止め、人々の日常を豊かに拡張する場として、おらかな広場を計画します。**

Urban Strategy



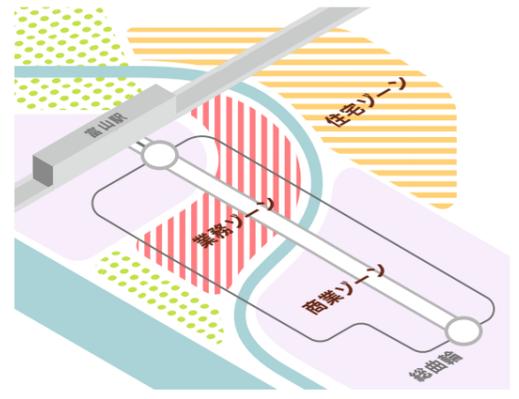
広がる緑とつなぐ緑

それぞれに特徴のあるオープンスペースが各所に広がり、憩いと楽しみの空間を提供することは大切ですが、地域全体の回遊性を高めるには、オープンスペース同士をつなぐ歩行者空間や路面電車などのモビリティが充実していることは、それ以上に重要です。城址大通りを歩行者中心の緑あふれる通りとして総曲輪エリアまで延長するとともに、路面電車を県庁前広場に乗り入れることで、周辺街区全体に賑わいの好循環をもたらします。

1 Parks as Spaces for Living

仕事中心の場所から生活と一体化した場所に

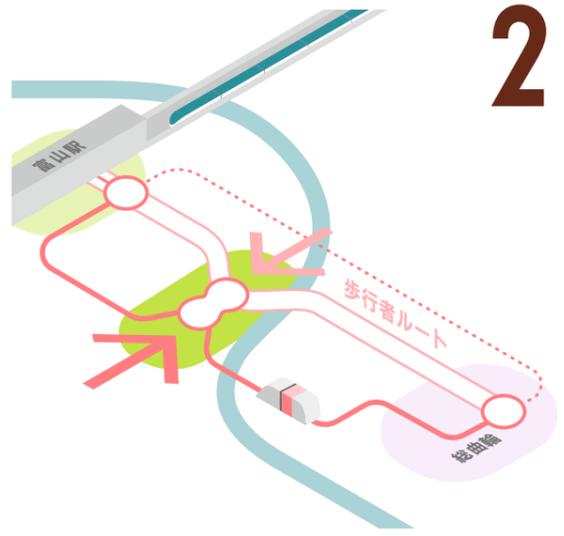
富山駅と県庁周辺は、主に働く場、商いを行う場、学ぶ場が中心に据えられており、憩う場や住まう場は東や北にはずれた場所に位置しています。県庁周辺エリアを暮らしに寄り添う生活中心の場とすることで、コンパクトな混合用途の中で都市の機能を整えます。新旧の建物が共存するエリアに、異なる時間帯ごとに多様な人々が訪れることは、都市を親しみやすく、持続可能なものとしします。



2 Transit Mobility

多様なモビリティの結節点

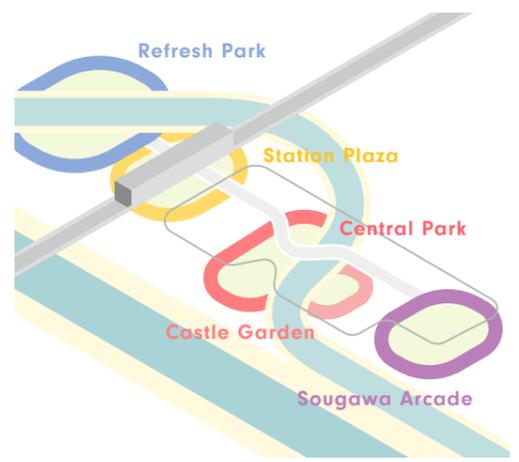
新幹線、路面電車、スモールモビリティ、自転車、歩行者と、移動の距離や頻度によって、移動手段を自由に選択することのできるモビリティのハブとして広場を位置付けることが、地域全体の連続性・回遊性を高め、周辺街区に賑わいをもたらします。城址大通りは歩行者のための空間として開放する一方、すずかけ通り側には、地下集約駐車場の入口と路面電車及びスモールモビリティのステーションを整備し、富山ならではのパークアンドライドを実践します。また、ドロップオフステーションを設け、新幹線を降りた瞬間から、帰りの新幹線に乗る直前まで、手ぶらで街中を散策できる、ウォークアブルなまちをつくります。



3 Open Space Diversity

選択可能なオープンスペースの多様性

敷地周辺には、開放的な水辺（富山運河環水公園）、賑わいのある交通広場（富山駅前広場）、地理や歴史を感じられる城跡（富山城址公園）、ファッションと文化の発信地としてのアーケード（総曲輪通り商店街）など、個性豊かなオープンスペースが存在します。その中で、県庁前の空地进行を日常の通勤や子育て、寝食に寄り添った新しい公園と位置付けます。来街者・従業者・居住者それぞれが、特色のあるオープンスペースの中から、気分や時間帯に合わせて、自らが過ごす場を選択することが可能です。



4 Stepping Activities

飛び石型のアクティビティ

コンパクトで持続可能なまちづくりを行う上で、新幹線の停車駅と県の機能の中心である県庁エリアとが近接していることは、大きな強みです。一方で、親水空間の中心である富山運河環水公園と商業の中心である総曲輪エリアはそれぞれ南北に離れています。県庁エリアにアクティビティの拠り所となる公園をつくることで、それらを一続きのシーケンスとして連続させ、地域全体の活性化を図ります。また、宿泊機能を付加することで、旅行者の地域周遊・長期滞在も促進します。

